

毎月一回15日発行 昭和51年7月15日発行・第78号 昭和45年9月4日第三種郵便物認可

7.30

リベラール

★特集 望月桂追悼号



7月号

Libertaire VoL, VI, No. 8

無政府主義誌

望月さんの終始

近藤 真柄

望月桂さんからの最後の手紙は、昭和50年7月11日松本南局消印の葉書である。丁度その頃、平岩巖氏、添田知道氏のお骨折りと御厚意で、父（堺利彦）の句帖（豊多摩と二度目の果鶴」という和綴りの筆跡本を出して頂いたので、一部献本したのであった。

「出た、出た。素晴らしい堺先生の俳句集御贈与、有難く、五〇〇（限定本）の中へ加わえられ、誠に光栄。何辺繰り返しても飽きることなし。美しい温味溢れるもの、思えばかつて久太の骨灰で咲かせた月見草の押し花を、先生に贈ったら、とても喜んで呉れた。

今庭に月見草が咲き初めた。

というもので、ペン画の月見草の一莖が書き添えてあった。筆跡も活達のものであった。

御本人の意見としては、今年の年始状も書いて頂いたのだが、時既に早くで、和田久さんのあの世から花を咲かせたのに 一対して、あの世からの年賀状となった。

最後にお逢いしたのは、ふく子夫人のお葬式には、間に合わず、おしげさんの旧友でもあり、私の友人でもある人と、お墓詣りに明科のお家に伺ったときであろうか。

一寸も昔と愛らない元気な望月さんで、カスミ網を張って、引っこって訪ねてくれる人をたのしみに待っているんだと大笑していられた。

これと前後しているかも知れない。近藤憲二の死後、望月さんの一世一代の代表作である大杉栄の画が掛軸になっているのを、大杉さんの遺族にお渡ししようかと思つたが、一寸望月さんも手許に欲しいと云っておられるのを聞いて、望月さんにお納めすることにしたとき、望月さんはおしけさんと二人で出京されて、お手渡しした。これが最後かな。

千駄木町の家、駿台クラブのバレット社、銀座裏の事務所、幡ヶ谷の家のその時々場面が、頭の中に浮ぶのであるが、一番古いのは、望月さんの画に父が字を書いて、売らたて会をしたことである。

場所も目的も子供の私にはわからなかったが、幾らか売れたような話が耳に残っている。その絵の一つ、まるい黒い玉に一筋の煙が上っているのが、かなり多くあった。父の書いた始めの五文字を忘れて、出てこないのが、思い出し思い出して、こうではなかったかと思う。「天下泰平、煙の蹴りたき日永かな」。

望月家又は他で御所持の方もあるかも知れないので、御訂正を願いたい、私には、ひどく印象的な画であつ

た。

今ここで、とやかく云っているより、あの世へいってきけば、早く判るのだが、これも思うようには行かないから仕方がない。

この世では長老でいらしたが、あの世では新入りの望月さん、遠からずお目にかゝりましょう。皆さんによろしく。

(51・2・23)

笛吹けと踊らず

議會の衆つとりより
や田の草とり



モチケイさんを憶う

古河 三樹松

私の望月桂さんとの出会いは、本郷駒込片町の労働運動社に出入した頃で大正大震災の少し前であった。望月さん一家は本郷千駄木町の横丁を入った閑静なところで五十余年たった今でも庭の石仏やきれいに咲き乱れていた山茶花の情景などなつかしく心に思い浮かぶのである。

望月さんはアナ系唯一の画家であり、また漫画家で、「漫文漫画」（大杉栄と共著）や大杉さんが肌ぬぎになつて一閑張りの机を前にした後姿を描いた絵は、林悽衛画伯の「出獄の日の〇氏」と共に大杉を描いた傑作として有名である。

望月さんは、大正・昭和期を通じて第一線に立つて活躍、いわば大杉の客将ともいふべき位置にあった。朝鮮人グループや水平社運動にも深く関係あり、農村運動同盟を設立、「小作人」を発行。郷里長野を中心に農民運動に取組み各地で多くの農村青年の支持を得た。また望月さん一家の万々は亡き福子夫人はじめ、今なお健在の義妹おしげさんなど皆善良で親切、世話好きで、冬の夜望月家のコタツに集まって老いも若きも慰め励まされたものである。望月さんは片足が一寸悪かったし、運動の

表面に華々しく出るよりも地道に根強く縁の下の力持の役割を負った人だが、傷つき倒れた多くの同志が、どれだけその支えに勇気づけられたことか。

大正十一年伊豆天城山中、大雪の猪越峠で久板卯之助さんが凍死した時も、望月、岩佐作太郎、村木源次郎さんら、三人が現地へ駆けつけたし、その小さな追悼碑の文字は望月さんの絵筆で書かれた。

十二年十二月、大杉さんら三人の合同葬が谷中斎場で行なわれる日の朝、労働運動社へ焼香を口実に紋付姿で現われた大化会（右翼）の下鳥繁蔵らがピストルを乱射、遺骨奪取騒ぎがあった。逃げる奴を他の同志と一緒に追跡した望月さんは、近藤憲二さんに組みつかれて倒れた下鳥の頭髪を引っつかみ、下駄で顔を「コン番生！」とばかり踏みねじってやった、と当日私に笑って語られた。何時もニコニコとあたたかい人柄でやさしかった望月さんのその胸底にひそむ烈々たる闘魂には驚き打たれたのであった。

大杉らの復讐に失敗、捕われた和田久さんや村木源次郎、テロリスト古田大次郎らの世話も望月家の人々は本当に親身になってやって下さった。

大正十五年朴烈大逆事件で栃木女囚刑務所に無期囚の金子文子を訪ね、彼女自殺の十数日前の文子の面影を写

生した望月さんの鉛筆画は、貴重なもので文さんの「何が私をかうさせたか」(黒色戦線社版)を飾っている。

昭和三年二月、和田久さんが秋田の獄で憤死。望月さんは近藤さんと共に秋田へ飛び遺骨を引取る。

後日になって望月さんから押花一輪が封入されて私宛に左の様な手紙が来た。

「あの世からの花」と題し、「突然ですが、故人和田久太郎君が生前「後事頼み置く事ども」の中に「僕の死灰も此の肥料方法で処分してくれまいか。あの世から一と花咲かせて見たいといふ洒落っ気さ。この事は望月家の人々にお願ひしたい。と思ふ……花は……月見草……」云々にもとづき、目下の百姓凡太郎にふさはしい仕事と存じ、美事に咲いたは久太郎！水位は歎きました世話で咲かせた凡太郎の手なみもお目につけ度くと、一輪お送りしました。永遠に友と離れたがらない久太郎君をどうぞお愛し下さる。」

久さんの骨灰で咲かせた月見草の押花は、今も私は望月さんの便りと共に大切に持っている。

久さんが獄中から望月さん宛の手紙に「君の様な人は陣の背後にあつて補助的業務をやってくれ。傷つき倒れた者の病院になつてくれ。これ亦大事業だ。最大必要事だ。」

まったくその通りの生涯を、九十才まで貫いた望月さんであつた。

今、大逆事件由縁の地、信州明科の小高い丘の中腹に望月さんは永遠の眠りについていられる。楢・常念など北アルプスを遠望に、徳高明神の森もほど近く、筆名犀川凡太郎と名乗って、最も愛した犀川の流れも美しいところである。モチケイさんと皆から親しみ愛された望月さんの死はまことに痛恨の極みだ。もっともつと長生して色々昔の話を若い人々に語り続けてもらいたかった。